



TITLE:

雜纂

AUTHOR(S):

CITATION:

雜纂. 日本外科宝函 1935, 12(1): 416-424

ISSUE DATE:

1935-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/204226>

RIGHT:

雜 纂

伯林 Langenbeck-Virchow-Haus に於テ1934年4月4日ヨリ 7日迄開催セラレタル

第58回獨逸外科學會ノ演說抄録(承前)

(Zbl. f. Chir. 1934, Nr. 23, S. 1368-1392, Nr. 24, S. 1403-1440)

講師 醫學博士 勝 呂 進 抄

第1宿題報告

Lexer: 化膿性感染及び其ノ結果ノ療法

創傷ニ醗膿菌ガ侵入スル時ハ、創傷化膿ノミナラズ、局所炎症ニヨリテ種々ナル全身障礙モ起ルモノナリ。局所組織ノ防禦攻撃作用ノ結果トシテ組織ノ壊死・崩潰再生ノ現象起リ、細菌ヤ毒素ガ血行又ハ淋巴ヲ通ジテ全身性ニモ吸収セラレテ、且ツ壊死セル自家組織ニヨリテモ亦タ全身性ノ違和、發熱ヲ來スモノナリ。是即チ所謂 Sepsis ナリ。局所組織ノ細菌ニ對スル戰闘力ヲ高メ、其ノ障礙ヲ可及的小範圍ニ止メ、全身ヲ其ノ感染ヨリ防ガント務ムル事ガ化膿性炎症治療ノ眼目ナリ。此ノ目的ニ向ツテ4方法アリ。

- a) 全身ノ抵抗力ヲ增強セシムル事
- b) 局所ノ防禦力ヲ高ムル事
- c) 原發性、續發性、淋巴管性又ハ血行性ノ何レタルヲ問ハズ化膿竈ヲ切開スル事
- d) 罹患部ノ安靜

局所の處置ノ不充分ノ時、又ハ不可能ノ場合、例ヘバ丹毒又ハ粘膜面ノ化膿ノ場合ニハ全身の賦活殊ニ恢復期血清注射及ビ輸血ガ有效ナリ。感染性吸收熱ノ高低ヲ目標トナシテ感染ノ輕重及ビ治療法ヲ講ズルコトノ必要性ガ判定セラル。併シ多クノ場合全身性處置(治療)ノ效果ハ甚ダ微弱ニシテ且ツ又タ甚ダ遅延シテ發現ス。故ニ全身性治療ノミニ信賴シテ局所治療ヲ省略スル譯ニハ行カスモノナリ。ソレノミナラズ局所治療ヲ一刻ニテモ遷延スルコトハ重大ナル惡結果ヲ來スモノナリ。(抄者曰ク、結局何ヲ偕テ置キテモ局所療法ヲ主眼トスベシトナリ。)

Bier ガ炎症性機轉ヲ增強シテ以テ局所ノ防禦力ヲ高メントシタルハ定ニ卓見ニシテ永遠ニ記念サルベキ事ナリ。此ノ治療方針ハ鬱血療法トシテ實現セラレタリ。(抄者曰ク、化膿性炎症局所ニ起リツ、アル變性ヲ病理學上必要ナルモノト理解シタルハ Metschnikoff ニシテ喰細胞說ナリ。此ノ見解ニ立脚セル治療法ハ化膿局所ノ溫巻法ナリ。)人工の浮腫ニヨリテ稀釋セラレタル病毒ガ餘計ニ吸収セラル、ガ爲ニ免疫物質ガ旺ニ產生セラル、ニヨルモノニアラズシテ、

鬱血療法ノ有效ナルハ網狀織内皮細胞ノ貪喰作用ヲ強ムルニヨルモノナリ。而モ此ノ方法ハ Lexer ニヨレバ兩刃刀ノ如ク、一方ニ於テ貪喰作用ヲ強ムル代リニ、他方組織自身ニモ亦鋭敏ニ作用スルモノナリ。即チ炎症ヲ増強セシムル事ハ、組織ノ壓力ヲ増シ、從ツテ白血球ノ蛋白溶解性酵素ノ作用ニヨリテ組織ノ融解ヲ促シ、以テ感染性浸出物ヲ餘計ニ擴ガラシムル危險ガアリ、尙其ノ上ニ鬱血帶ヲ取り去リタル後ハ吸收作用ガ旺ニナル爲ニ血行ヲ介シテ病毒ノ傳播ヲ促シ、又血栓、栓塞ヲ惹起スル危險アリ。(抄者曰ク、結局鬱血療法ハ推奨サレザルモノナリ。)

更ニ鬱血療法ノ一トシテ Breiumschlag 及ビ濕布繃帶ガ用ヒラル。サレド膿瘍ヲ熟セシムルニハ組織ヲ犠牲ニセネバナラス故此ノ方法ハ廢スベキナリ。皮下性癰疽ニ際シ早期ニ切開スルコトヲ忌メバ、而シテ鬱血療法等ヲ行ヘバ其ノ結果トシテ膿ハ必然臑、關節、骨等深部ニ侵入スル虞アリ。但シ浸潤ガ極メテ初期又ハ未ダ進行シラザル場合ハ鬱血療法等非觀血性ニテモ治スルコトアリ。一般ニ排膿ヲ早く行ヘバ行フ程治癒シ易シ。局所ノ防禦力ヲ高メ非觀血性ニ一時的ニ炎症ヲ急速ニ靜止セシメタリシ場合、特ニ X 線療法ノ如キ場合ニハ、所謂靜止性感染 (Ruhende Infektion) ニ移行スルモノニシテ、コハ骨や關節ニ於ケル化膿ノ場合往々起リ易キモノナルガ、非觀血性治療法ニヨリテ此ノ如キ ruhende Infektion ノ状態ヲ持ち來スコトハ却テ危險ナリ。

更ニ Bier ハ化膿セル組織ヲ燒灼シテ病原菌ヲ局所デ滅殺シ、同時ニ局所並ニ全身ノ防禦力ヲ高メ得ル主張ス。然シカカル免疫ニヨリテ抵抗力ガ高マルト云フ事ハアリ得ルヤモ知レザレドモ、夫レガ充分ナル免疫程度ニ達シ而カモ時期ヲ失セズ間ニ合フヤ否ヤハ Erb ノ實驗ニヨレバ疑ハシ。Lexer 自身ノ經驗ハ述べズ。

手術ノ目的ハ今日最早病原菌ヲ撲滅スル事ニハアラズ。何トナレバ若シ細菌ヲ撲滅セントスレバ同時ニ組織ヲモ殺シテシマウガ故ナリ。Vuzin ヲ使用スルコトニヨル嫌氣性菌乃至他ノ醗菌ニ向ツテノ豫防的深部消毒法 (Klapp, Rosenstein) モ亦此ノ缺點アリ。化膿性炎症ノ慢延ヲ阻止スル法ハ自然ノ防禦力ヲ増強セシムル以外ニアリトハ思惟シ難シ。如何ナル化學的物質モ役立たズ。多少有效ナルハ蜂窩織炎 (Phlegmone) ニ比シ限局性ナル疔、瘍等ニ向ツテ Laewen ノ行フ如キ自家血液ヲ其ノ周圍ニ注射シ得ル事位ノモノナリ。

『機能障礙ヲ貽スコトナクシテ必要ナ限リ大キク而シテ出來得ル限リ小サク切開ス』トノ方針ハ今日ニ於テモ昔日ト同様ニ正シキ治療方針タルヲ失ハズ。但シ化膿竈ガ全身感染ノ源トナリ居ル時ハ機能障礙等ヲ顧慮スルコトナクシテ如何ナル方向ニデモ自由自在ニ切開ヲ加フベク、四肢切斷ノ如キモ敢テ意トスルニ足ラズ。

血栓、栓塞ノ危險アル場合ニハ靜脈結紮モ亦有效ナリ。(Laewen, Clairmont) 同時ニ主幹靜脈ヲ圍ム空隙ヲ切開スルモヨシ。

排膿後組織ノ恢復力ガ不充分ノ場合ハ、治癒ヲ促スベク、アラユル方法ヲ講ズベキナリ。刺戟的濕布、軟膏、糖ノ注射、鬱血性充血又ハ溫浴等ヲ交互ニ用フルヲ可トス。

今日マデ好ンデ用ヒラレタル濕布療法ニヨリテ防禦壁ガ何等作ラレザルニモ拘ラズ、^{〔早期切開〕}ハ病原菌ヲ組織内ニ擴散シ、尙ソノ吸收ヲ増強セシムモノナリトシテ、之ヲ恐ル、者アリ。サレバカカル一般ノ謬見ガ如何ニ重大ナル結果ヲ生ムカヲ思ヒ見ヨ。切開ニヨリテ確ニ吸收作用ハ高マレド、ソレハ今日迄不適當デアリ、且ツ又危險デアルガ故ニ避ケネバナラス方法ニヨリテ切開ヲ行ヒタル時ノミノ事ナリ。分泌物ハ組織壓ノ高キ爲外ニ向ヒテ流ル、モノニシテ、唯亂暴ナ處置ノミガ組織感染ヲ擴メ、吸收ヲ旺ニスルニ過ギズ。鉤ヲ強クカケルコト、創面ノ膿ヲ強ク拭フコト、組織ニ壓ヲ加ヘテ膿ヲ搾リ出スコト、化膿性壞死性ノ肉芽（特ニ骨髓内）ヲ搔破スルコト等凡テ嚴禁スベシ。

創面ハ管又ハ毛細管^{〔ドレーン〕}ニヨリテ膿又ハ分泌物ノ排泄ヲ容易ナラシムベシ。此ノ際乾燥^{〔ガーゼ〕}・濕^{〔ガーゼ〕}・^{〔ロードホルムガーゼ〕}、又ハ他ノ藥劑ニ浸シタル^{〔ガーゼ〕}ヲ用ヒ様ガ、ソナ事ハ問題ニナラズ。サレド^{〔タンボン〕}ヲ2日以上長ク置キテ創面ヲ乾燥セシムルガ如キ事ハ避クベク、之ニハ軟膏ヲヨシトス。

電氣刀ヲ用ヒテ化膿性炎症ヲ切開スル事及ビ熱ニヨリテ凝固シタル化膿性浸潤組織ヲ Schlinge ニテ除去スルコトハ一大進歩ナリ。手術後ノ細菌吸收ハ絶對ニ豫防セラレ、且ツ出血モ疼痛モ止メ得ラル。創液ハ凝固セル創面ヨリ排泄セラレ得ルモノナリ。何トナレバ痂皮ノ形成無キ故ナリ。

手術過誤ノ第一歩ハ往々切開方向ヨリ端ヲ發スルコトアリ。即チ不必要ニ大ニ切開シタリ、又ハ切開ノ數及ビ大サノ不充分ノ時ナリ。其ノ他屢々見ラル、誤ハ a) 創面ノ機械的清拭（特ニ不可ナルハ鋭ヒヲ以テノ搔破）、消毒藥ノ塗布 b) 化學的（Chinin 劑）及ビ熱的（氷囊）刺激 c) ^{〔タンボン〕}ヲツメ過ギル事 d) 炎症手術ニ Esmarch ノ驅血帶及ビ浸潤麻醉ヲ用フル事等ナリ。

最後ニ患部ノ安靜高舉ニ對シテハ繃帶交換ノ際ニ、此ノ點ニ關シ注意スベク、針金又ハ厚紙等ノ副子ヲ用フルガヨシ。

急性期ニ續イデ瘻管形成、不良ノ肉芽、浮腫等面倒ナル病狀ヲ呈スル事アレド、之等ハ最初ヨリ慢性ノモノト同様壞死部ヲ切除スベシ。何トナレバ之等ハ靜止性感染トシテ斷ヘズ危險ヲ藏スルガ故ナリ。

過去30年間ヲ回顧スレバ、一方ニ於テ手術ヲバ益ニ局限シ、他方ニ於テハ組織及ビ個體ノ局所的並ニ全身の防禦力ヲ高メントスル方法ヲ發見シ、更ニ之ヲ改良セント試ミタルモノナリ。此ノ努力ハ何人モ疑ハザレド、尙夫レニハ缺點モアリ。今日迄ニ得タル見解ニ照シテ誤ヲ正ス義務アル事モ自明ノ理ナリ。サレド輒近ノ此ノ傾向ヲ知ラザル者モ亦多ク存在ス。即チ最初最モ手術ニ都合ヨキ時期ニ外科醫ノ手ニ來ラズシテ、不充分ノ手術ヲ受ケタリ、又ハ全ク之ヲ行ハザルガ如キ場合モ屢々アリ。夫レハ又外科醫ガ餘リニ専門的ニ分科シ、外科學總論ヲ根本的ニ會得シ居ラザルニヨルモノナリ。

如何ニ新ク努力ヲナサウトモ第一ノ要求ハ正シキ目安ヲ立テ、早期手術ヲ行フ事ナリ。勿論

此ノ場合經驗アル外科醫ノミガ正シク判斷シ正シク之ヲ行フ事ガ出來ルモノナリ。

19) V. Seemen (München): 化膿性疾患ノ電氣的療法

電氣刀ヲ使用スル事ハ普通ノ刀ヲ用フルヨリ更ニ有效ニシテ重症ノ蜂窩織炎ノ場合ニモ電氣凝固ニヨリテ生命ヲ救ヒ得ル事アリ。

20) Löhr (Magdeburg-Altstadt): 急性並ニ慢性骨髓炎ノ肝油_Lギブス_T療法

骨髓炎ノ膿瘍期ニ出來ルダケ廣ク、而モ骨膜ヲモ切開シ、排膿ヲヨクスル爲ニ、創面ニ肝油軟膏ヲ填充シテ縫合シ、其レニ_Lギブス_T繃帶ヲ施ス。此ノ際_Lドレーン_T等ハ全然用ヒズ。急性又ハ慢性ノモノニ此ノ方法ヲ3 1/2年前ヨリ行ヒ好結果ヲ得ツツアリ。

21) Borchard (Gleiwitz): 骨盤骨髓炎

骨盤骨髓炎ノ死亡率ハ高ク、33—75%ニ達シ、而モ診斷ハ甚ダ困難ニシテ、右側ノ場合ニハ蟲様突起炎トノ鑑別が必要ナリ。其ノ鑑別ニ當リ骨髓炎ニ於テハ一般症狀ガ極メテ重篤ナル事ニ注意スベシ。炎症ガ局所性ノ場合ニハ膿瘍形成ヲ待テテ切開スベシ。腸骨々髓炎ニテハ特ニ敗血症ヲ起シ易キ故ニ早期ニ腸骨ヲ切除スルガヨシ。

22) Nehr Korn (Wuppertal, Elberfeld): 化膿及ビ感染創ニ對スル Dijozol ノ效果

沃度丁幾ノ代リニ Dijozol ヲ使用セルニ、消毒力及ビ肉芽促進作用強ク、而モ組織ニ對シテ無害ナリ。

23) Schmiedt (Plauen): 人免疫血清ニヨリテ治癒セル葡萄狀球菌敗血症ノ一例

13歳ノ小兒、瘍 (Carbunkel) ニ罹シ、兩親ニヨリテ不潔ナル針ニテ切開セラレ、32時間後増悪ス。電氣凝固。4日後ニ敗血症ヲ起ス。白色葡萄狀球菌ヲ培養シ得、之ニヨリテ20人ヲ免疫シ22立ノ血清ヲ得、毎日100—200cc 注射、55日間ニ6200cc ノ血清ヲ注射シテ全治ス。

追加 1) Ritter (Düsseldorf):—— 1916年大戦以來、化膿性疾患ニ_Lギブス_T繃帶ヲ推賞ス。重要ナルハ安靜ト化膿竈ヲ廣ク切開スル事ナリ。化膿性炎症ニハ消毒 (Antisepsis) ハ不必要ナリトシ、Bier ノ鬱血療法ヲ急性感染ニ應用スルコトハ最早ヤ行ハズ。

2) Klapp (Marburg):—— 彼ノ提唱セル切開法ニヨレバ癰疽切開ニテ壞死ヲ起ス事ナント主張シ、Esmarch ノ驅血帶ヲ施セバ病竈發見ガ容易ナリトナシ、急性炎症ノ場合ニハ Bier ノ鬱血療法ニ反對ス。(抄者曰ク、急性感染性炎症ニ向ツテ鬱血療法ヲ行フコトハ消炎法ノ原理ト牴觸スルカラ行ハヌ方ガヨイ、併シ結核ノ如キ慢性炎症ニハ行ツテモヨイトハ多年鳥瀉教授モ主張サレテキル所デアル。(鳥瀉外科學總論第44頁及ビ301頁參照))

3) Clairmont (Zürich):—— 化膿性炎症ノ場合ハ早期手術ガ最も重要ニシテ、此ノ爲ニ全力ヲ盡スベシ。化學的物質ノ效果ニ就テハ局所性ニモ全身性ニモ失望セシメラレタリ。最近 Aigolosol (銀成劑) ヲ使用シテ好結果ヲ得タルガ如ク思ハル。兎ニ有害害ニハナラス。更ニ毎日50—80cc ノ恢復期血清 (連鎖狀球菌) ヲ反復注射ス。Esmarch ノ驅血帶ニハ賛成ス。軟膏繃帶トシテ Perubalsam ヲ推賞ス。

4) Usadel (Berlin) :—— 炎症組織＝局所麻酔ヲ行フ事ハ今日迄ノ經驗ニテ何等ノ障礙ナシ。之ガ爲ニ病原菌ヲ健康部ヘ侵入セシムルコト無キハ臨床上ニモ實驗ニモ立證セラレタル所ナリ。Lexer = 反對ス。

5) Henschen (Basel) :—— Bakteriophage ノ局所及ビ靜注、並ニ輸血ヲ推賞ス。

6) Vogeler (Berlin) :—— Bier ノ門弟トシテ曰ク、Bier ハ年來彼ノ主張トシテ「ガーゼタンポン」ハ(異物)ニシテ、從テ創面ニ有害ナルモノトナシ、之ヲ全廢シ、創面ハ繃帶セル儘1週間安靜ニ放置シ置クヲヨントス。

病竈乃至患肢ヲ安靜ニ保持スル目的ハ排液 Tampon ヲ全廢スルコトニヨリテ始メテ完全ニ其ノ目的ヲ達スルモノナリ。創ナルモノハ他ノ何物ヨリモ創液ノ中ニ在リテ最も安靜ナルモノナリ(Tampon ナル異物ノ介在ヲ許サズ)。而シテ創液ナルモノハ治癒作用ヲ有スルモノナリ。(詳シク曰ヘバ、ソノ如キ heilende Wirkung アル創液—膿汁—ヲ猥リニ排出セシムベカラズ)。(抄者曰ク、膿ヲ有害ナルモノト考ヘ、全部創外ヘ排除セントノ行爲ハ膿球ノ病理的生理的意義ヲ知ラザルノ致ス所ナリ、化膿ガ治スル爲ニハ化膿菌ガ局所ヨリ消却サレル爲ニハ膿球即チ膿汁ハ必要ナルモノナリ。)

7) Lexer (München) :—— 再ビ彼ノ結論ヲ述ベ、Usadel ノ炎症局所ノ浸潤麻痺説ニ反對ス。化膿創並ニ肉芽ノ刺戟療法ニ於テ重要ナルハ1方法ヲ絶對ノモノトシテ擇ムニアラズシテ、各種方法ヲ屢ニ代ヘル事ナリ。Löhr ノ肝油療法ニ於テ新創面ヲ縫合スルハ甚ダ氣ツカワシ。

24) Rieder (u. Schmutzler) (Hamburg): 菌血症ト生存臓器

血行中ニ侵入セル細菌ガ結局如何ニシテ殺サル、カ今日未ダ不明ナリ。此ノ問題ヲ解決スベク、Starling ノ心—肺標本ヲ應用シ、又タ他ノ臓器ヲ之ニ接續シテ生理的血行下ニ檢素ヲ試ミタリ。然ル時ハ連鎖狀球菌、葡萄狀球菌及ビ大腸菌ハ一時的抑壓セラレタル後著シク増殖ス。酸素ヲ餘計ニ送リテモ效果ナキヲ以テ肺ニ於テ細菌ガ死滅スルトハ考ヘラレズ。次ニ肝臓ヲStarling ノ標本ニ接續シテ實驗ヲ行ヘバ、菌ハ漸次減少シテ終ニ全ク無菌狀態トナル。故ニ肝臓ノ特殊作用ニヨリテ菌ハ死滅セシメラル、モノト考ヘラル。(抄者曰ク、細菌ニ限ラズ凡テ異種類脂蛋白體、一般のニハ「異物」ニハ喰燼作用ヲ營ム所ノ遊走性乃至定在性白血球(組織球モ此ニ屬)元形質内ニ於テ死滅、破却、同化セラル、モノナリ。肝實質細胞ニ限ラズ總ジテ Epithelzellen ニハ此ノ作用ナキモノト考ヘラル。)

25) Sauerbruch (Berlin): 氣管枝擴張症ノ手術的療法

1肺葉ニ限ラレタル氣管枝擴張症ノ80%ハ先天的畸型ニ屬スルモノナリトノ余ノ説ニハ小兒科醫ハ炎症性ナリトシテ反對セルガ Rössle ハ近來余ノ説ニ賛成スルニ至レリ。斯ル擴張症ノ大部分ハ若年者ノ左下葉ニ見ラル。療法トシテハ mehrzeitig = 手術ヲ行ヒ、廣範ナル癒着ヲ起コサセツ、全肺葉ヲ剔出スルガヨシ。58例中49例全治セリ。

26) Schulze (Berlin-Lichterfelde): 肺壓縮手術ノ氣管枝形狀ニ及ボス影響

氣胸ニ於テハ氣管枝ハ短縮シ、且ツ内溝ハ扁平トナル。癒着ノアル場合ハ末梢氣管枝ノミナラズ、中心ニ近キ氣管枝モ屈曲スル事アリ。胸廓切除ノ場合ニモ氣管枝ハ多少共屈曲ヲ蒙ル。

27) Rütz (Berlin): 外傷性横隔膜ヘルニア⁷

外科醫ガ最モ屢々遭遇スルモノハ急性ヘルニア⁷ニアラズ慢性ヘルニア⁷ナリ。之ハ外傷時ニハ何等ノ症狀無カリシモノガ小孔ヲ殘シテ治癒セル場合、腹壓ノ高マリタル爲此ノ孔ヲ通ジテ腹部臓器ガ胸腔内ニ突入スル爲ニ起ルモノナリ。而シテ種々雜多ノ症狀ヲ呈ス。療法トシテ Sauerbruch 教室ニ於テハ、transpleural-diaphragmalニ根治手術ヲ行フ。此ノ際横隔膜神經ノ上部切斷ヲ行フコトハ重要ナル操作ナリ。然シテ其ノ小孔ノ小ナル時ハ單ニ縫合シ、大ナル場合ニハ重ネ合ハセテ縫合ス。(抄者曰ク、横隔膜ヘルニア⁷ノ根治手術ニテ開胸スルナラバ平壓開胸術ハ絶對的ニ必要ニシテ過壓開胸ニテハ目的ヲ達セザルモノナリ(辻村秀雄)。併シ胸廓下口ノ弾力性大ナル幼兒ニテハ腹腔ヨリノ手術可能ナリ(藤浪修一)。何レニシテモ横隔膜神經ヲ切斷スル必要無キモノナリ。)

28) Fulde (Berlin): 噴門機能ニ對スル實驗的影響

Sauerbruch 教室ノ研究ニヨレバ食道ト胃トノ接續部、即チ Antrum Cardiacum ハ Membrana phrenico-oesophagea ナル弾力性ノ膜ニヨリテ圍繞サル。其ノ膜ハ横隔膜下面ニアル食道裂口ヨリ出テ、食道ニ於テ上下ニ去ル2葉ニ岐ル。即チ Antr. cardiacum ハ横隔膜ノ上ニモ在ラズ、下ニモ在ラズ、正ニ横隔膜内 (intradiaphragmal) ニ在ルモノナリ。

Antrum cardiacumニ於テハ噴門ニ對スル3閉鎖裝置アリ。a) Antrumノ上端ニアル括約筋様ノモノ (Ander 氏ノ Cardia sup. diaph) b) 横隔膜ノ裂口ヨリ出ル筋肉 (吸氣時收縮ス) c) Antrumノ下端ニアル皺ノ集合 (Ander 氏ノ Cardia inf. anatomica) ニシテ、前2者ハ別個ニ働クモノナリ。此ノ3者ノ機械障礙ガ噴門痙攣ヲ起スモノナリ。噴門ニ於ケル局所障礙ノ外ニ、全身障礙又ハ反射的ニモ、此ノ閉鎖機能ノ障礙ヲ來スモ、之ハ植物神經ニヨリテ起ルモノナリ。

29) Rieder (Hamburg): 胃及十二指腸潰瘍ニ於ケル胃壁神經ノ病理學的變化

健康胃ニ於テモ Auerbach 及ビ Meissner 神經叢ニハ神經細胞ノ變性ヲ見ルモノナレドモ、Rノ檢シタル71例ノ潰瘍胃ニ於テハ此ノ變性ニ多少ノ差アリシモ、穿孔性潰瘍ノ場合ト慢性潰瘍ノ場合トハ大シク差ナシ。胃加答兒ノ場合ニハ潰瘍ノ場合程其ノ變化多カラズ。胃癌ノ場合ニハ此ノ變化ハ癌ノ輕重ニ比例ス。次ニ臨床上潰瘍ノ症狀ヲ呈シ、而カモ潰瘍療法ヲ行ヒタルモ效果ナク、遂ニ胃切除ヲナシタル3例ニ於テハ胃加答兒ノ所見ハ無カリシモ Gross ノ法ニテ檢査セルニ神經叢ニ變化ヲ發見セリ。此ノ3例ニ見タル變化、並ニ胃炎ノ場合ノ變化ヲ潰瘍ノ前徴ト見做シ、又潰瘍時ニ見タル神經、並ニ其ノ細胞ノ變性ヲ潰瘍ノ Genese ト關聯スル事ハ興味アル事ナレドモ、形態學的ニハ其ノ證據トナル可キモノハ得ラレズ。更ニ研究ヲ要ス。

30) Sebening (Frankfurt a. M.): 胃ノ孤立性、多發性⁷ポリープ⁷、及ビ⁷ポリープ⁷症、並ニソノ胃炎及ビ癌トノ關係

「ポリープ」ハ屢々癌ノ前驅トナル事アル故ニ、可及的ニ速ニ手術スルガヨシ。〔ポリープ〕症ニ於テハ大切除ヲ行フベシ。

31) Hanke (Freiburg i. Br.): 實驗的潰瘍性ホルモン「胃炎」ト其ノ成因ニ就テ

動物ニ Insulin 及ビ Suprarenin ノ大量ヲ注射スル時ハ、胃粘膜ニ著シキ變化ヲ來シ、初メ糜爛ヨリ終ニ潰瘍ヲ生ズルニ至ル。故ニ胃潰瘍ハ内分泌並ニ自律神經ノ障礙ニヨリテ起ルトナス説ニ賛成ス。

32) Orth (Homburg, Saar): Braun 氏吻合ヲ行スル前胃腸吻合術後ニ發生セル空腸潰瘍ノ手術々式ニ對スル一技術提唱

此ノ場合ニハ胃腸吻合部ノ上下出入腸管ヲ Petz ノ縫合器ヲ以テ Brann 氏吻合ノスグ上部ニテ切断シ、残留腸管ハ漿液膜縫合ニテ確實ニ閉鎖シタル後 Billroth II ヲ行フ。3例ニ於テ好成績ヲ得タリ。(術式ヲ映寫ス)

33) Brackertz (Erlangen): 肝臓内膽道炎ニ就テ

膽囊及ビ輸膽管ニハ全ク變化ナク、肝臓内ノ膽道ニノミ炎症ノアル例ヲ手術シタルニ死亡セリ。試験穿刺ニヨリテ黃色葡萄狀球菌ヲ得、試験切除標本ハ膽道周圍ニ僅ノ浸潤ヲ見ルノミ。斯ノ如キ膽道炎ハ内科的ニ處置スベキモノニシテ、外科的手術ハ多ク無效、膽道ニ「ドレーン」ヲ挿入スル位ニ止ル。

34) Bronner (Düsseldorf): 胆汁ノ水素「イオン」濃度ト結合

野菜食ノ場合ニハ胆汁ハ「アルカリ」性ナルモ、肉食ノ場合ハ酸性トナル。〔カルチウム〕ハ酸性ノ時溶解シ、Cholesterin ハ「アルカリ」性ノ時溶解ス。動物ニ於テ食餌ヲ急激ニ變ズル時ハ、Cholesterin 及ビ Bilirubin 石灰ノ溶解度ヲ變化セシメ、規則的ニ沈澱セシムル事ヲ得。B ハ更ニ之等ヲ結晶的ニ沈降セシムル實驗ヲ行ハントス。(以下次號)

京都外科集談會昭和9年11月例會

11月20日午後7時ヨリ京大樂友會館ニ於テ開催、下記ノ臨床例演説及ビ伊藤教授ノ「歐米視察談」アリタリ。

臨床例

肋骨骨髓炎ノ1例	大 山 鱗 三
「ヒグローム」ニ就テ	井 口 洋 平
尿尖禁症ノ1治療例	矢 島 忠 久
Sigma elongatum mobile ノ手術治療例	大阪高醫 富 永 昌
腸間膜肉腫ノ1例	廖 一 雄
シュモール氏軟骨小體ニ就テ	石 原 康 次

瓦斯瘰癧ノ1例

追 加

北野病院

吉 武 信
大 岡 義 秋

1) 血液浸潤ヲ思ハシメタル急性多發性筋炎ノ1例

2) 血栓性靜脈炎ノ1例

北野病院

橋 本 長 利

野球投球骨折及ビ腕角力ニ因ル骨折

横 山 講 師

追 加

北野病院

近 藤 講 師

追 加

北野病院

薛 承 増

特 別 講 演

歐米視察談

伊 藤 教 授

京都外科集談會昭和9年12月例會

12月20日午後6時ヨリ京大樂友會館ニ於テ開催、下記ノ臨床例報告、勝呂講師ノ就任演說並ニ小南教授ノ特別講演アリタリ。

臨 床 例

惡性耳下腺腫ノ頭蓋骨轉移ノ1例

永 井 亮 二

「ヘルニア」手術後ニ來レル慢性腹壁硬結

房 岡 隆 三

「ヒグローム」ヲ思ハシメタル肩胛關節部腫瘤

高 橋 齊

脾脱疽ノ1例

田 島 猪 三 夫

骨縫合補遺

横 山 正 夫

3才男兒ニ發生セル乳癌

宇 野 亮

特發性總輸膽管囊腫ノ1例

藤 原 紫 郎

結核性十二指腸狹窄ノ1例

山 内 達 雄

結核性患者ノ弛緩性肉芽面ニ對スル結核「コクチゲン」軟膏ノ效果

稻 本 晃

1) 奇怪ナル「フレグモーネ」

2) 囊腫型骨結核 (Jesson) 症例

大阪高醫

盛 教 授

「バンチ氏病」ノ1例

高 安 彰

柔道家ノ腰薦部「レ」線像ニ就テ

横 山 講 師

就 任 演 說

肺臟機能ノ一時的停止ニ關スル實驗

勝 呂 講 師

特 別 講 演

飲酒ト過失

小 南 教 授

醫學講習會開催

昭和10年2月1日(金曜日)ヨリ同月21日(木曜日)迄京都帝國大學醫學部ニ於テ次記ノ如ク醫學講習會ヲ開ク。志望者ハ昭和10年1月15日限り出願セラレタシ。

定 員	外科學整形外科學	60名	內科學	100名
	眼科學	50名	婦人科學產科學	50名
	小兒科學	50名	皮膚病學微生物學	50名
	耳鼻咽喉科學	50名		

各學科ニ於テ出願者20名以上ニ達セザル場合ニハ講義ヲ廢シ見學ノミヲ以テ開講スルコトアルベシ。講習科1學科ニ付金10圓トシ願書ト共ニ前納。

詳細ハ京都帝國大學醫學部事務室ヘ御承合アリタシ。

會 員 動 靜

入 會

京都帝大外科研究室	杉 浦 紀 男
東京市澁谷區大和田町85	鈴 木 重 一
佐世保市島瀬町32	森 口 謙 二
門司市白木崎淺野セメント醫局外科	白 石 清 秋
神戸市神戸區下山手通8丁目	隈 鎮 雄

前號入會者中後藤良後トアルハ良俊ノ間違ニ付キコヽニ訂正ス。

轉 居

豊橋市松葉町9 平野重造方	平 林 吉 雄
千葉市本町2丁目607	星 四 郎
山口縣徳山町徳山海軍共濟組合病院	堀 田 慎 之
別府市公園通り1丁目 古市別荘	西 原 昶 郎
山口縣宇部市新川元櫻井病院跡	淺 海 吾 市
宇和島市市立病院外科	仲 田 實 三 郎
京阪沿線枚方大阪女子醫專	小 津 茂
仙臺市北材木町45	米 村 長 敏
臺灣臺中市錦町5ノ9 體仁醫院	林 躍 鯉